

| | | |
|--|------|------|
| クリ超低樹高密植並木植栽培は、「筑波」「丹沢」に適応できる | | |
| <p>[要約]</p> <p>クリ「筑波」「丹沢」は、超低樹高密植並木植栽培にすることで、若木期（樹齢10年以内）において慣行低樹高栽培と同等の収量と果実重が得られる。「筑波」では、果実重が平均4g程度重くなる。</p> | | |
| 茨城県農業総合センター園芸研究所 | 成果区分 | 技術情報 |

1. 背景・ねらい

クリ「筑波」「丹沢」は、従来の慣行低樹高栽培（以下、低樹高栽培）に適応できる品種として周知されている。しかし、低樹高栽培をさらに発展させた超低樹高密植並木植栽培（以下、超低樹高栽培）への適応性は明らかとなっていない。そこで、超低樹高栽培での収量性および果実品質を明らかにする。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 「筑波」における超低樹高栽培は、低樹高栽培と同等の収量を得られ、果実重が平均4g程度重くなる（図2）。また、「筑波」における裂果率は、超低樹高栽培と低樹高栽培で明確な差がない（表1）。
- 2) 「丹沢」における超低樹高栽培は、低樹高栽培と同等以上の収量を得られ、同等の果実重が得られる（図1）。また、「丹沢」における裂果率は、超低樹高栽培と低樹高栽培で明確な差がないが、年により高まる場合がある（表1）。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 「利平」「銀寄」「岸根」「神峰」などの品種は、樹勢が強く1年生枝（発育枝）に着穂させる超低樹高栽培には適さないと考えられる。
- 2) 超低樹高栽培の「石鎚」は、樹冠面積当たりに占める着穂数が多い傾向があり、収量は確保できるが果実のシワ症状が多く果実も小さくなりやすいので、更なる検討が必要である。
- 3) 超低樹高栽培は、枝を強く切り戻すことで強樹勢を維持できることから、改植圃場等に適する。
- 4) 超低樹高栽培は、剪定位置が1.5～2.0m程度であることから、除草作業は小型草刈機や刈払機等で行う必要がある。
- 5) 結果母枝数は、陽当たりや風通しを考慮すると1㎡あたり3～4本程度が好適である。

4. 具体的データ

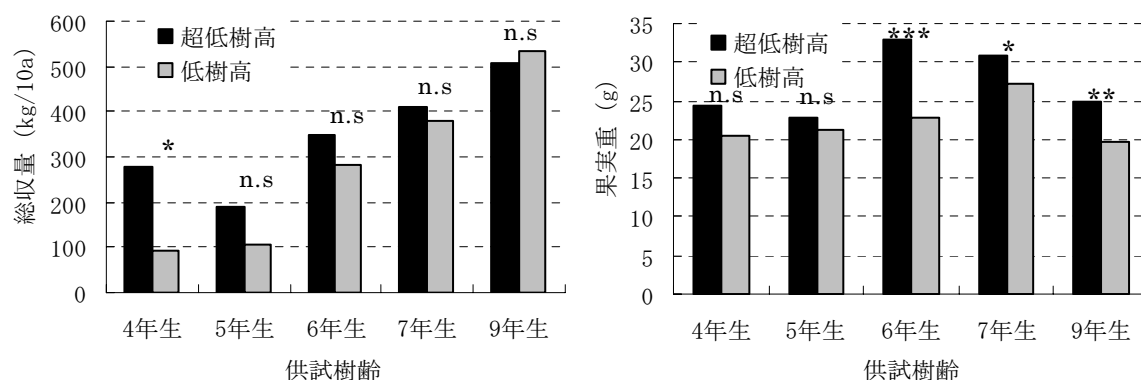


図1 超低樹高密植並木植栽培における「筑波」の収量・果実重の推移

注) t 検定は* : 5%, ** : 1%, *** : 0.1%, n. s : 有意差なし

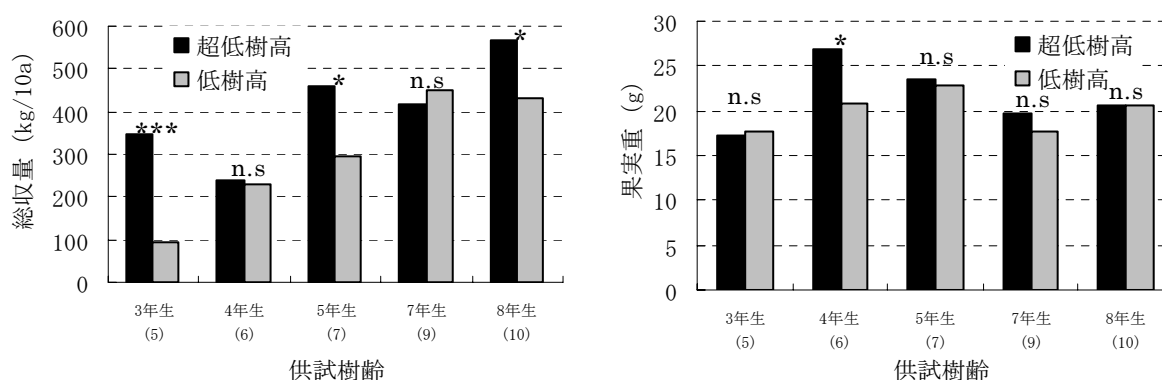


図2 超低樹高密植並木植栽培における「丹沢」の収量・果実重の推移

注1) t 検定は* : 5%, ** : 1%, *** : 0.1%, n. s : 有意差なし

注2) 供試樹齢 () 内数値は、低樹高樹の樹齢である。

表1 超低樹高密植並木植栽培が「筑波」「丹沢」の裂果率に及ぼす影響

| 栽培方法 | 筑波 | | | | | 丹沢 | | | | |
|------|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|-----|------|
| | H16 | H17 | H19 | H20 | 平均 | H16 | H17 | H19 | H20 | 平均 |
| 超低樹高 | 0.2 | 4.0 | 6.7 | 0.5 | 2.9 | 12.2 | 10.1 | 19.0 | 6.8 | 12.0 |
| 低樹高 | 0.1 | 1.4 | 3.2 | 2.6 | 1.8 | 9.7 | 6.7 | 7.7 | 6.9 | 7.8 |
| t 検定 | — | — | — | — | n. s | — | — | — | — | n. s |

注) t 検定は n. s : 有意差なし

- 栽培概要：超低樹高密植並木植栽培は列間 4m・株間 2m で 10a あたり 125 本を栽植、低樹高栽培は列間 4.5m・株間 4.5m 正方植で 10a あたり 48 本を栽植した。

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

クリ超低樹高密植並木植栽培のマニュアル化・平成 12~20 年度・果樹研究室